



# 接骨院に 心理学を入れてみた

〔6〕

寺田接骨院 寺田弘志

「響くところを押したほうがいい」・・・○か×か

JR茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

体のどこかをいためた人たちが、ここを訪ねて来られます。

「今日はどうされましたか？」

「このあたりが痛みます」

「ここでしょうか？」

「はい、そこを押さえてもらおうと痛いですが、こっちのほうまで響きます・・・」

「そっちに響くとしたら、痛いところはおそらく伸びすぎています。まず、響くほうからみていきますね」

「はい」

「響いているこのあたりを触ると痛いですか？」

「えーっと、そのへんが痛いですが」

「伸ばすと痛いですか？ 縮めると痛いですか？」

「伸ばすと痛いですが。縮めると痛くないです」

「縮めると痛くないなら、ここも伸びすぎているようです」

「そうなんですか」

「そうなると、このあたりを押さえると痛いですか」

「あー、そこも痛いです」

「ここを伸ばすと痛いですか？ 縮めると痛いですか？」

「ここは縮めると痛いですが、伸ばすと痛くありません」

「ここは縮みすぎているみたいですね。ここが縮んだせいで、はじめに押さえたところや響くところが伸びすぎたのかもしれませんが」

「へー」

「では、縮んでいるところをしばらく伸ばしながらほぐしますね・・・これくらいほぐして元にもどすとどうですか？」

「あっ、もう痛くないです」

「では、はじめに触ったところを押さえると、またどこかに響きますか？」

「いいえ。いまはどこにも響きませんし、痛みもとれました」

「響いていたところを押さえると痛いですか？」

「いいえ、もう痛くないです。不思議だなー」

どこかを押さえると、別のところに痛みや違和感、しびれが出ることがしばしばあります。押さえたところと違うところに影響が出るので、響く感じがします。押さえるとどこかに響くところを押さえるということは、いいことなのでしょうか？ よくないことなのでしょうか？

まず、神経が皮膚の表面の近くを通っているところを押さえると、その末梢に響くことがあります。

感覚神経が刺激されると、神経が分布する領域に響きますが、これは正常な反応です。

施術をしても、響くのはなくなりませんから、神経を押さえるのはやめておきましょう。

神経が皮膚の表面の近くを通っているところは、肘の内側、上腕の外側、下腿の外側、鎖骨の上のくぼんだところ、脇の下、肩胛部などにあります。

これとは別に、神経の走行とは関係のないところでも響きが生じることがあります。  
たとえば、右肩を押さえると左肩が痛いとか、左腰を押さえると右腰が痛いとかです。

なぜこのような響きが生じるのかを考えると、前回取り上げたシステムズ・アプローチが役に立ちます。

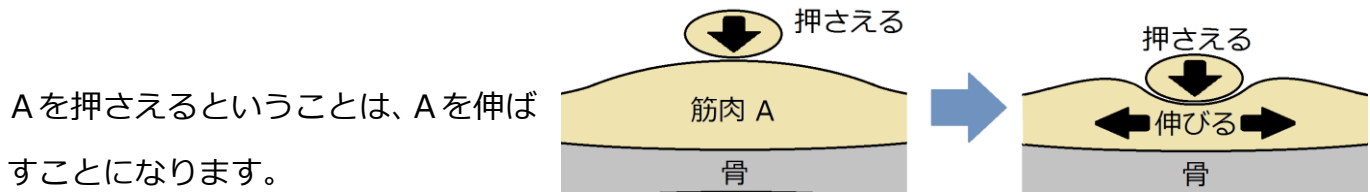
そこだけを見ていると、なぜ響くのかは説明できませんが、体をシステムとしてとらえれば説明できます。

あるところ（A）を伸ばすと、一緒に伸びるところ（B）と、反対に縮むところ（C）が生じます。

伸ばしたのと逆の方向へAを縮めると、一緒にBは縮み、反対にCは伸びます。

体はそのようなシステムになっています。

システムズ・アプローチではAとBは相補的な関係、AとCは対称的な関係と考えます。



押さえたところが伸びると、Bが伸びすぎたり、Cが縮みすぎたりして不具合が生じ、響くという現象が起きます。

押さえれば押さえるほど響きます。押さえ続けても響かなくなることはありません。

ですから、押さえるとどこかに響くところを押し続けるのは「×」なのです。

「響かせるのがいい」という人もいますが、私は反対です。

ただ、押さえるかわりに、さすって縮めるのなら、響かなくなる場合もあります。

どこかを押さえて、別のところに響くということは、つぎの2つの場合があります。

1 Aを押さえると、伸びすぎたAがさらに伸び、その分、縮みすぎたCがさらに縮んで不具合が生じ、Cに響く。

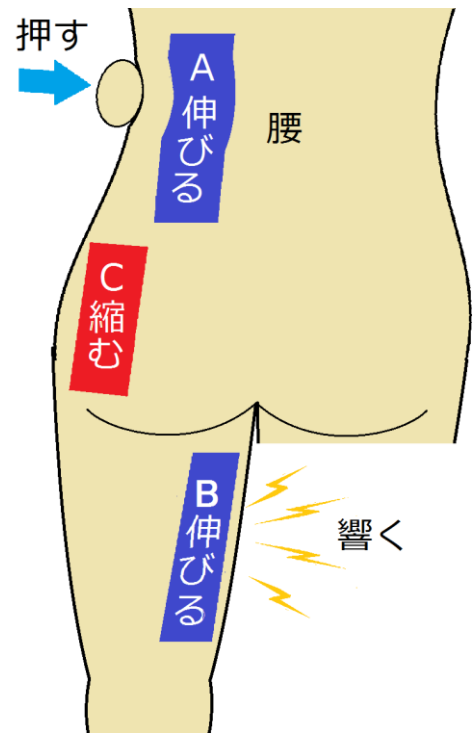
2 Aを押さえると、伸びすぎたAがさらに伸び、その分Cが縮み、Bがさらに伸びすぎて不具合が生じ、Bに響く。

Aを押さえると、BかCに響きます。まれに、両方に響くこともあります。

1の場合も2の場合も、Cを伸ばすか、AかBを縮めるかすれば、Aを押しても響かなくなります。

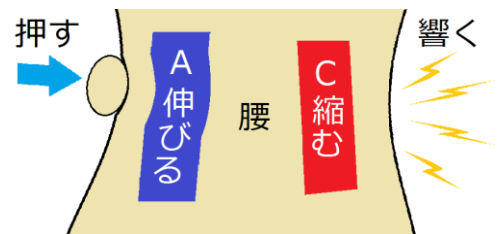
はじめに私と患者さんのやりとりをあげましたが、これは2の場合にあたります。Cの部分をほぐして伸ばしたことで、伸びすぎたAとBは元の長さにもどり、Aを押してもBに響かなくなったというケースです。（右の図では、腰Aを押すと、骨盤が下がって脚を外に広げる筋肉（中殿筋）

Cが縮み、脚を閉じる筋肉（内転筋）Bが伸びすぎて、Bに響くという例を図にしてみました）



1の場合のケースには、左腰を押したら右腰に響くといった例があります。

この場合、右腰が縮んでいるのであれば、右腰を伸ばすと、左腰を押しても響かなくなります。



Aを縮めたいときに、相補的なBを縮めたり、対称的なCを伸ばしたりするのが、システムズ・アプローチです。

あるいはAを伸ばしたいときに、相補的なBを伸ばしたり、対称的なCを縮めたりするというのも、システムズ・アプローチです。

ただし、常にAとBは相補的で、AとCは対称的だということはありません。関係性はそのときそのときで変わりますから、その都度、どのような関係になっているのか確認しながら施術する必要があります。

当院では、患部への施術だけでなく、体をひとつのシステムと考え、患部と関係性のある箇所からシステムに変化を起こすことで患部の症状を改善させる施術をおこなっています。